

悪役令嬢は  
想定外の溺愛に困惑中



天衣サキ

Saki  
Amari

## 目次

悪役令嬢は想定外の溺愛に困惑中

5

番外編

それぞれの思惑

333

書き下ろし番外編

ある悪女の末路

351

悪役令嬢は想定外の溺愛に困惑中

プロローグ

横たえられたベッドの上で小さく身じろぐ。

「んっ……」

体が熱い、息が苦しい。

全身の感覚はひどく鋭敏なのに、頭は霧がかかったようにボンヤリしている。

「大丈夫か？」

「……っ！」

突如大きな掌で髪を撫でられ、ビクリと背が震えた。

何、これ。

髪に触れられただけでこんな反応……普通じゃない。

ドレスの感触すら、火照った体の表面をゾワゾワと這い回るようで煩わしい。

「あつ、い……いやっ……はやく、服脱ぎ、たい……」

「ルイズ、待ってろ」

絶<sup>すが</sup>るように見上げると、怖いくらい綺麗な男が切なくも狂おしい眼差しで私を見下ろしていた。

「でん、か……？」

ジュリアン・フォン・カルテオン殿下——出会って以来およそ十年、私は運命から、この男から逃れようと必死に足掻き続けてきた。

でも、そんな私の決意すら捻じ伏せるほど、今のジュリアンは蠱惑的で目を逸らせない。

輝くブロンドに澄み渡る空色の瞳。

その眩<sup>まはゆ</sup>いばかりの美貌は誰もが夢見る王子様みたい——

そう思った瞬間、体の奥底に潜んでいた熱が大きくうねって下肢がふると震えた。

「ああっ……！」

堪らずうつ伏せてシートにしがみつく。こんなおかしい。

ジュリアンが欲しい。欲しくて欲しくて堪らない。

胸に湧き上がる浅ましい欲を否定すればするほど、動悸はさらに激しくなり息苦しさが増してゆく。

目を瞑り苦しい胸を押さえていると、頭上からジュリアンの優しい声音が降ってきた。  
「すぐに楽にしてやる」

ジュリアンが、背中では編み上げられたコルセットの紐をするりと解く。  
「……んう」

体を締め付ける圧迫感から解放されても、この体の疼きは一向に治まらなかった。  
辛い、苦しい、熱い。頭が、おかしくなりそう……

解き髪がサラサラと背にかかる感触にすらヒクリと体が震える。

「ダ、メ……私、おか、しい……殿下、は、離れて……」

「ダメだ」

体を押しのけようと伸ばした手は、しかし阻はばむようにやんわりと握り込まれた。

「あ……」

その瞬間、節くれだった手の感触にドクリと胸が鳴る。

ジュリアンの手は、こんなにも大きく遅しかっただろうか。

「こんなそなたを、放っておけるわけがないだろう」

そう言いながらジュリアンは私の指先に口づけ、剥き出しになった背の輪郭をなぞるように撫で上げる。

それだけで痺れるような疼きが脳天を貫き、唇から甘ったるい声が零れ出た。

「ひあ……だめっ……!」

私の制止など無視して、ジュリアンは優しく私の頬に口づける。途端に下肢から何かが溢れ出る気配を感じた。ハッとして咄嗟に腿を擦り合わせると、ジュリアンは脱げかけたドレスの裾をたくし上げ、剥き出しになった素足にゆっくりと触れた。

「やっ……!」

くすぐったさと羞恥から逃れるよう身を振よじるも、ジュリアンは逃すまいと私の足首を掴み、脛から腿へと指を滑らせた。

「っ、あ、ああ! やめっ……で、んか……」

震えるような快感がゾワゾワと背筋を這い上がる。

私は息を荒らげながらうつ伏せた顔を横向け、目だけでジュリアンを見上げた。

その瞬間ゾクッと全身に悪寒が走る。

それは決して「友人」に対して向けられる視線ではなかった。

ジュリアンの着衣には一分の乱れもなく、身形は完璧な王子そのものだ。けれど私を見るその眼差しだけが全てを裏切っている。

ギラギラと私を射貫く獐とうもう猛な瞳——その奥に揺らめく激しい炎はむちが狂おしいほどの欲

を伝えてくる。

どうして……

私達はこれまで、これからもただの友人だったはずだ。なのに……どうして私はジュリアンに女として求められることを嬉しいと思っているのだろうか。

「ルーズ……」

そっと壊れ物に触れるようにジュリアンが私の頬を撫でた。

ああ、ジュリアンってこんなに綺麗だったかしら。

まるで人を惑わす悪魔のよう——

私は吸い寄せられるようにフラフラと起き上がって、ジュリアンの首根にしがみついた。

「殿下……はっ、辛い……助、けて」

ドレスもコルセットも外されて、ほとんど裸同然であることなんて気にする余裕もなかった。今はただこの熱から逃れたい——

目の前のこの男が世界一魅力的に思えて、欲しくて欲しくて堪らない。体がこの男に激しく犯されたがっている。

「ルーズっ！」

そんな私を、ジュリアンは逞しい腕で強く抱きしめた。

ああ、嬉しい……

彼の広い胸板が私をすっぽりと包み込み、節くれだった指先が離すまいと私の背に深く食い込む。そこに感じる痛みすら、今はこの上もなく甘やかに感じられた。

もっと、もっと強く、奥深くまで私を——

本能のまま顔を上げると、息が触れるほどの距離でジュリアンと視線ががち合った。

「あ……」

情欲に濡れた美しい碧玉の中に、私が映る。

緩く波打つ赤髪に淡い緑眼——それはよく見慣れたはずの姿なのに、見知らぬ女のよう淫らに蕩けきった表情でこちらを見返している。

まるで男を誘う淫婦のように——

そうして気付けば、どちらからともなく唇が重ねられた。激しく貪るように、奪うように、舌と舌とがもつれ絡み合う。

「はっ……」

角度を変えるたび漏れる吐息の甘さに脳が痺れ、うねるような情欲の波に吞み込まれていく。

そして口づけの合間に彼がもどかしげに服を脱ぎ捨て、私を抱きしめた。素肌が触れ合いジュリアンの熱を直に感じて、まだ私の意識はどこか現実感を欠いていた。

やっぱりこれは、夢かもしれない。

だって私がジュリアンとこんなことをするはずがない。

あなたが選ぶのは私ではない、あなたは絶対に私を愛さない。

そんなことは誰よりも知っている。

なのに――

今私を貪り苛む熱はあまりにもリアルで、抗う理性が本能に塗り潰されていく。

「ルイズ、私のルイズ……」

狂おしく私の名を呼ぶジュリアンの声を聞きながら、どうしてこんなことになってしまったのかと、この時私は必死に記憶の欠片を拾い集めていた――

## 第一章 動き出した運命の齒車

私の名はルイズ・エティエンヌ。ここカルテオン王国において、王家に次ぐ権力を持つエティエンヌ公爵家の長女だ。

恵まれた環境の中で大切に育てられてきた私には、誰にも言えない秘密が一つある。それは物心ついた頃から「日本」という国で生きた前世の記憶があることだ。

日本にはこの国のような剣や魔法はなかったけれど、文明は遥かに進んでいてとても平和な世界だった。

でも、残念ながら日本での私の人生は幸せとは程遠かった。

早くに父母を亡くしてからは親戚の家を転々とし、奨学金でなんとか大学を出てやつと就職できた会社は絵に描いたようなブラック企業だった。毎日深夜残業は当たり前、家と会社の往復ばかりで友達は少なく、休日も一人でいることがほとんど。

そんな私の寂しさを埋める手段の一つがゲームだ。没頭している時間は束の間現実を忘れられる――本当に孤独な女だった。

そして訪れた最期の瞬間は実にあっけなかった。職務中に上司の運転する車で多重事故に巻き込まれ、助手席にいた私だけが運悪く死んでしまったのだ。

よく死に直面した時、記憶が走馬灯のように……なんて言うけれど、私もまさにそれを経験した。

取るに足らない二十五年の人生——最期に願ったことは『人並みに温かい家庭を築いてみたかった』ということ。

そのささやかな願いは、ルイズとなった今もしっかりと胸に刻み込まれている。

こんな前世の記憶を持つせいか、時折妙な既視感に見舞われることがあった。

初めて目にするはずの風景なのに、どこかで見たことがある……と胸がざわつくような経験が何度も。

妙だと思いつながらも、私は前世の記憶に引きずられてるのだと考えていた。この世界は、たまたま前世でプレイした何かのゲームに似ているだけだろうと。

でも、その漠然とした感覚が一つの確信へと変わったのは忘れもしない、ジュリアン・フォン・カルテオン殿下と初めて顔合わせさせられた、およそ十年前のことだった——

## §

ある日の夕食後、折り入って話があると父に言われ、緊張しながら執務室を訪れていた。

今思えばそれが一つ目の運命の分岐点だった。

いつもは人当たりのいい笑みを浮かべている父が、珍しく渋い顔のまま口火を切る。

「……ルイズ、実はジュリアン殿下の婚約者候補にお前の名が挙がっている」

「え……」

父から告げられた衝撃の事実には私は色を失った。

ジュリアン殿下といえば国王陛下の嫡子で、王太子の座に最も近いとされている人物だ。その権力に群がる大人達にデロデロに甘やかされて育ち、我儘放題の馬鹿王子としても有名である。王宮では彼の傍若無人ぶりに心を壊し辞めていくものが後を絶たないそうだ。

そんな彼だから婚約者選定には難儀していると父から聞いていた。どうにか話がまとまりかけても、気に入らないと殿下自身が滅茶苦茶にしてしまうのだとか。

でもまさか私に白羽の矢が立つだなんて思ってもみなかった。



いや、家柄からしたら必然かもしれない。それにしたって温かい家庭を築きたい身としては殿下のような男性だけは死んでもごめんなのだけれど。

言葉を失い黙り込む私に、父は大袈裟に眉を顰めてふると首を横に振った。

「ここだけの話、私も大事な一人娘をあの子にやるのは忍びないのだ」

「ならお断りしてください！」

語気を強め前のめりに告げると、父はうつと言葉を詰まらせた。

私にも社畜だった記憶があるので父の心情は痛いほど理解できるし、宰相である父の上司は国王陛下なのだから、断るなんて正気の沙汰ではないだろう。

でもこの話には大事な将来がかかっている、私だって簡単には引き下がれない。

胸の前で指を組み、切実なお願ひポーズで父を見つめる。

やがて父はふうつと溜息をつくと困ったように笑った。

「分かった、お前がどうしても嫌なら断ってくれていい。あとのことは私がなんとかしよう。だがそれは一度顔合わせをしてからの話だ」

これが父の精一杯の譲歩なのだろう。

私は渋々ながらも「分かりました」と頷いた。

数日後、私は朝からピカピカに磨き上げられ、引きずられるように王宮へ連れていかれた。

それが後の運命を決定づけるとも知らずに――

王宮への道すがら、気晴らしに外の景色を眺めていた。

けれど王宮に近づくにつれ徐々に目が離せなくなっていく。

これまでとは比べ物にならないほど強く感じる既視感。

初めて目にする景色のはずなのに、どこかで見た記憶がある？

ドクドクと心臓が嫌な音を立てる。

何か悪い予感がする。

やっぱ引き返してもらおうか――そう思った瞬間、無情にも馬車は緩やかに停止した。そして外から扉が開かれ、もう引き返せないことを悟る。

重苦しい気持ちで馬車を降りると、待ち受けていた侍女の案内で豪華な応接室に通された。

「ジュリアン殿下にございます」

そう侍女から紹介を受けた瞬間、ズドンと全身稲妻に打たれたような衝撃を受けた。

金髪碧眼の王子様に一目惚れしたわけではない。

まるでゴミか虫けらでも見るような目でこちらを見つめる彼を前に、ポンツとあるゲームパッケージが頭に浮かんだからだ。

同時に目の前にいる王子様のめくるめくダメ男ぶりが頭の中を駆け巡る。

『ダメンズパラダイス〜困ったイケメン達との蜜愛トライアングル〜』——前世の私がストレスを溜め、文句を言いながら完走した乙女ゲームだ。

その攻略可能なメインキャラの一人が目の前のジュリアン王子だった。

ちなみに文句を言っていたというのは単純にこのゲームが私の好みから大きく外れていたためだ。

何せ攻略対象が全員『ダメ男』だったのだから。

それでも一度始めたゲームは必ずやりとすのが信条だったせいで、どれだけ好みじゃなくても私はこのゲームの完全クリアを遂げた。お陰で人並み以上の忍耐力が身につき、ブラック企業での日々も耐えしのぶことができた……という過去も今となっては笑い話だ。

ようやくこれまで感じていた既視感の正体が掴め、私は安堵とも失望ともつかない溜息を零した。

そうして目の前で不機嫌そうに立っている少年をまじまじと見つめているうちに、つ

いポロツと口が滑る。

「無理だわ……」

しまった、と思った時にはもう遅かった。

「貴様……今なんと言った！」

お人形のような顔を凶悪に歪めて、ジュリアンは怒り心頭といった様子で私を睨み上げる。

「あ、ええと、その……私のような者には大変荷が重いので、どうか速やかにこのお話は白紙に戻してください、と申し上げました」

破れかけのオブラートに包んでなんとか言い直すも、ジュリアンは白い頬をポンツと真っ赤に染めた。どうやら怒りは激怒にランクアップしたようだ。

それにしても……彼は同じ年だと聞いていたけれど、まだ私より背も小さく、まるでよく吠える小型犬のようだ。だからだろうか、この時の私はすっかり油断してしまい、ジュリアンへの恐れや警戒心をすっかりなくしてしまっていた。

「おのれ、許しもなく勝手に意見するとは……無礼者めが！ この私を誰だ——」

「先程ジュリアン殿下とご紹介いただきました」

だからつい友人のような気安さでしれっと答えると、ジュリアンはいよいよ頭から湯

気でも出そうな勢いで怒りを爆発させた。

「生意気なヤツめっ！ もとよりチンクシャ下等な貴様に高貴な私の相手など務まるものか！ 愚か者めが、身の程を知れ！」

すらつと腰に下げた剣を鞘から引き抜いて、ジュリアンは私の鼻面にピタッと剣先を突きつけた。

よく研ぎ澄まされているであろう鋭利な刃先にゴクリと喉が鳴る。刃物を突きつけられるだなんて経験は初めてで、本能的恐怖から思考も体もフリーズしてしまふ。

もうこれは小型犬なんて可愛いもんじゃない、獣もされてないんだ狂犬じゃないか。場の空気が一気に張り詰める。

こんな異常事態だというのに、周囲に控える侍従やお付きの騎士達は、おろおろするばかりで諫めることもしない。あろうことか見ないふりとはばかりに目を背ける者すらいる始末。

なんてことだ……周囲の大人達が揃いも揃ってこれほど使えないとは……

色を失う私に満足したのか、ジュリアンは意地悪く笑って剣を鞘へと戻した。

ほうつと安堵の溜息が漏れると同時に、床にへたり込みそうになる。それを意地で堪えてキッと睨むと、ジュリアンはピクッと不快げに片眉を吊り上げた。

なんて根性の悪い男だろう……

本当に斬る気はなかったにせよ、人に刃先を向けるなど言語道断。何かあってからでは取り返しがつかないではないか。

それに——チンクシャ……ねえ。

造作だけ見れば確かにジュリアンは絵画の天使のように美しい。

太陽のごとく輝く金髪に、ガラスのように透き通った蒼い瞳。

黙ってさえいれば憎たらしいくらい完成された「美」そのものだ。

しかもメインキャラの貫禄とでもいうのか、まだ子供ながら存在感も半端ない。

でも、残念ながら肝心の性根は相当にひん曲がっているようだ。何せ初対面からして、ゴミか虫けらでも見るような目で私を見ていたのだから。

この怒りだって私が婚約を断ったことではなく、私のような「ゴミ虫けらごとき」に拒絶されたことでプライドがいたく傷ついたためだろう。

残念ながらこれまで聞いていたジュリアンの評判は決して大袈裟なものではなかったようだ。

前世の記憶も相まって、この男への嫌悪と怒りが沸々と湧いてくる。

忍耐には自信のある私でも、この横暴ぶりはどうしても見過ごせない。幸い、父から

は顔合わせさえ終えれば、断つてもいいと言質は取っている。

この際だ、最後に一言くらい言わせてもらおう。

すうはあと深呼吸して、私はまっすぐにジュリアンの目を見据えた。

「包み隠さず正直に申し上げましょう。私はかなり（精神的な面で）面食いなのです。殿下のような（心根の）醜い方の伴侶など死んでもごめんです」

背筋を伸ばし、毅然と言い放つ。

そんな私の様子に棒立ちで呆気にとられるジュリアン。

私にはっこり微笑んで、死ぬほど練習させられた淑女の礼をした。

そしてジュリアンがフリーズしているのを良いことに、逃げるようにその場から立ち去る。

——これで父との約束は果たしたわ！

性悪なジュリアンに言いたいことも言えて、今は清々しいほど気分がいい。

仮に私から断らなくとも、プライドと傲慢の塊みたいなジュリアンはもう二度と私になんて関わりたくないはずだ。

そこまで考えて、ふと足を止める。

冷静に考えたら、一時の感情で私はとんでもないことをしてしまったのでは？

これまで品行方正に生きてきた私が、まさかジュリアンにあんな発言をするなど父も想定していなかっただろう。

王家への不敬は最悪死刑だ。

あれこれと嫌な想像が頭を過つては、ぶるつと身の竦む思いがした。

それでも——私にだって譲れないものがある。

悪女だか悪役だか知らないけど、シナリオ通りに生きるなんて絶対にごめんですからね！

帰宅後、私は父に見合いの顚末を正直に報告した。父は特に驚いた風もなく「そうか」と言って笑った。どうやら既に知っていたらしい。

父の穏やかな様子にホッと胸を撫で下ろしつつ、私は自室に戻って原作の記憶を整理することにした。

『ダメンズバラダイスく困ったイケメン達との蜜愛トライアングル』。

通称ダメバラ。これはタイトル通り攻略対象が全てダメ男というちよつと変わった趣向で、一部に人気だった乙女ゲームだ。ダメなヤツほど可愛い！ というダメンズ思考なお姉様達には堪らない代物だったらしい。

私には理解できない感覚だけれど、唯一ヒロインのナビゲーター的存在だった精霊は、とても優しく純粋で好ましかった記憶がある。

攻略対象でないことが残念なほどに……

一応乙女ゲームらしく攻略対象は皆権力者で、地位に相応しく傲慢かつやりたい放題だ。一人の女を愛するなど愚かなこと。浮気DVモラハラ上等と己の欲望のまま享樂に生きる男達……百歩譲って二次元世界でなら愛でられる性癖かもしれない。でも現実世界でそんなダメ男達、絶対に関わりたくない。

「どうしてよりにもよって転生先がダメパラの世界なんだろう……」

私は机の上で頭を抱え、小さく呻いた。

大好きな乙女ゲーム作品は他にたくさんあったというのに。

まあ嘆いたところで現実是不変ならないのだから仕方がないか。

建設的に今できることをしよう、と気を取り直してペンを握る。

ダメパラは、二人のダメヒーローの間で揺れ動くビッチ……もといヒロインとして、三角関係を楽しむ恋愛ゲームだ。そしてどのヒーローを選んでもライバルとして一人の女性が存在する。

私——ルイズは、ジュリアンの婚約者で彼のが好きという設定を持ち、ジュリ

アンルートでヒロインのライバル役になる女性なのだ。

この国——カルテオン王国の現王には、母親が違う六人の王子がいる。

ジュリアンは亡き正妃が産んだ唯一の嫡子だったので、次期王太子と目され周囲からチャホヤ甘やかされて育った。その結果、傲慢不遜で頭も性格も素行も女癖も悪い、血筋と容姿以外は全くとこなしの最低男に育ってしまう。

そんなジュリアンの婚約者であるルイズは、宰相の娘にして筆頭公爵家の令嬢だ。

政略上の婚約者ながら愚かなジュリアンを支えるため、あらゆる努力を惜しまない健気な女性としてゲーム内では描かれている。

でも当のジュリアンは何が気に入らないのか、彼女を鬱陶しいと嫌って浮気三昧を繰り広げていた。

その鬱憤が斜め上にはっちゃけて、表向きでは完璧な令嬢を演じながら、裏では陰湿でビッチな悪女として振る舞う……というのがルイズの公式設定だ。

当然令嬢にあるまじき行動なんだけど、心が満たされないから身体だけでもって感じだったのかもしれない。前世の私も孤独で寂しい身の上だったから、なんとなくルイズの気持ちは分かる気がする。

そんな日々の中、運命のヒロインと出会って恋に落ちるジュリアン。

当然ヒロイン憎し！　なルリーズだけど、彼女はヒロインに対して小物っぽい嫌がらせなんてしない。

狡猾なルリーズは、親身にヒロインの相談に乗ったり支援したりと仲のいい友人ボジションに収まって、最終的にヒロインを魔獣の森に放置するといふなかなかアグレッシブな妨害をする。あえてヒロインにトドメを刺さないところはまあ、流石に乙女ゲームなので甘いというかご都合主義感是否めないけれど。

そうして、最終的にヒロインがジュリアンを選べばルリーズは地下牢行き、選ばなくても婚約解消の上で修道院行きとなる。どちらにしてもルリーズの恋心が報われることはない……というところまでがゲームの物語だけれど、私としては地下牢も修道院も絶対にお断りだ。

どうせ生まれ変わったのなら、既定通りではない「ルリーズ」という女の生を私なりに全うしてみたい——自分の役割を自覚した途端、そんな気持ちが強くなる。

もしもゲーム内のキャラクターとは違うジュリアンだったなら、あえて彼の婚約者になる道も選択肢にあったかもしれない。

でも、ジュリアンは残念なくらいゲームの印象そのままの男だった。

容姿だけは確かに美しい。

だがしかし、チャホヤされてはヨイショされ続ける環境で純粹培養された結果、よわ年齢にして歪んだ性根が表情から全身にまで滲み出ている。

あの救いようなない満点なクズっぷりには涙が出そう……

私は平凡でも穏やかで温かい家庭を築きたいだけだ。

せっかく素晴らしい環境に生まれ変わったのに、輝かしい未来を暴君たるジュリアンに潰されるなんて冗談ではない。

つまり私の希望は今後一切ジュリアンとは関わらないこと一択……なのだけれど——

「うーん……」

頬杖をついてさらに考え込む。

見合いさえすれば断つてもいいと父は約束してくれた。

でもこのままただ嫌だと駄々をこねるだけでは弱いような気がするし、再び婚約話を持ち上がったては堪らない。ジュリアンとの関わりが今後一切生じないよう、父とはここでしっかり交渉したほうがいいかもしれない。

交渉は人の心を動かすことが肝要だ。国王陛下に頭の上がらない父の心を根本から動かすよう説得を試みなければ——

ないよう、この婚姻における将来的な不利益を全面に押し出して、丁寧な説明を試みる。父は暫しの沈黙の末、神妙な面持ちで「お前の気持ちはよく分かった」と聞き入れてくれた。

その後王家とどのように話をつけたのかは分からないが、ジュリアンと私の婚約話は白紙となったようだ。どうやら私の言動に対してのお咎めもなかったようで、ホッと胸を撫で下ろす。あまりに順調でちよつと怖いくらいだけれど……

それに父の立場を思えば申し訳なくもある。でも待ち受ける未来を知る身としてはこれが最善の選択のはずだ。

今回の件で物語の流れを変えることはできたし、このままだけ私はジュリアンに関わることもなく、ヒロインのお邪魔役は回避できるはず！ と喜んでいただけだけれど……

「お父様、こちらは……」

奈落の底へ突き落とされる、とはこんな心地だろうか。

ジュリアンとの顔合わせからきつちりひと月後、私のもとへ陛下直々の召喚状が届いた。封蝋は確かに王家のもので、金で箔押しされた美しい便箋には一週間後の日付と私

の名が記されていた。

陛下が私との個人的対面を希望されるだなんて……

父は何か知っているのか「大丈夫だから行ってきなさい」と安心させるように肩を叩いてくれたけれど、その夜は不安でろくに眠ることができなかった。

陛下が私を呼び出す意図はなんだろう。先日のジュリアンへの不敬以外思い当たらない。

やっぱり何かお咎めを受けるのだろうか……

この一週間は生きた心地がせず、あらゆる最悪の事態が頭を過つて<sup>よぎ</sup>いた。

そうして迎えた運命の日、私は王宮行き<sup>の</sup>馬車に揺られていた。

「お待ちいたしておりました、エティエンヌ令嬢」

不意の呼びかけにハッと我に返る。

いつの間にか馬車は王宮へ到着していて、前回と同じ侍女が降車口でにこやかに<sup>たやす</sup>佇んでいた。

私は覚悟を決めて馬車を降り、侍女の背を追う。

案内され、辿り着いたのは謁見室だった。細かい金細工の施された重厚な扉を死んだ魚のような目で見上げる。

私の二度目の人生は今日終わってしまうのだろうか……まだ十年しか生きていないのにな……

そんな私の悲愴な様子に思うところがあつたのか、侍女が小声で耳打ちをしてきた。

「悪いお話ではないはずですよ。どうかそう緊張なさらずに」

侍女のその優しさがジンと胸に染みて、目頭が熱くなる。侍女はさらに私の手を握って励ますように微笑んでくれた。

「ありがとうございます……！」

勇気をもたらった私は意を決して扉をノックした。

「入れ」と重々しい声と共に中から扉が開かれる。背後から聞こえる「頑張ってください！」との励ましに背を押されながら、私は謁見室へ足を踏み入れた。

てつきり上段の玉座にいるものと思っていた陛下は、私を待ち構えるように下段に佇んでいた。

私は慌てて淑女の礼をして、深く頭を下げる。すると意外にも優しい声で、陛下は私に顔を上げるよう告げた。

「よく来てくれたな、ルイーズ嬢」

「お目通り叶いまして恐悅至極に存じます、陛下。ルイーズ・エティエンヌでございます」

ます」

「ああ、そう固くならず楽にしてくれ。今日はそなたに折り入って頼みがあつて呼んだのだ」

頼み？ 咎めの間違いじゃないだろうか。平静を装いつつも内心は戦々恐々だ。

震えそうになる足を叱咤激励しつつ、私はまた深々と頭を下げる。

「わたくしにできることでしたらなんなりと」

「ふむ……実はな、先日の見合いの模様、大変面白……いや、興味深く聞かせてもらった。ルイーズ嬢には是非とも我が愚息、ジュリアンの友となつてもらいたいのだが……」

どうだろうか？」

一瞬間の中が真っ白になって、陛下の言葉をうまく呑み込めなかった。

友？ 私があのジュリアンの？

さあつと青靄める私とは対照的に、陛下はニコニコと人好きのする笑みを浮かべている。私は震え出しそうになる手をぎゅっと握った。

「恐れながら陛下、先日わたくしは殿下を侮辱し、不敬を働きました。そんなわたくしが友など……」

「ああ、そのことは不問に付す。むしろそなたの存在はジュリアンのいい刺激になると



見込んでの頼みなのだ」

陛下は芝居がかったように両手を上げ、「やれやれあの愚息のことを考えると頭が痛い」と頭を振りつつ苦笑した。

その父親然とした優しい表情におや、と思う。

ジュリアンがあんな傍若無人<sup>ほうじやくぶしん</sup>に育ったのは、それを助長する人間と環境があったからだ。

ジュリアンを愚息と呼んで憚らない<sup>はばか</sup>ということは、どうやら陛下もそのことはよく把握されているようだ。それどころか嫌われることしかしていない私をわざわざジュリアンに近づけようとするだなんて……

賢王と名高い陛下が、これほどジュリアンを気にかけながら、それでも暴君のように育っている彼を放置する意図はなんだろう。

まさか、試している？

そう思い至った瞬間、背筋がゾクツとした。

陛下には現在六人の王子がいる。悪評はあれど血筋の正当性からジュリアンが王太子最有力候補と目されているけれど、陛下は公の場で一度も『誰が次の王太子か』について明言していない。

彼はジュリアンの父親である前に冷徹な統治者だ。原作でも、血筋だけで優遇したり、後継者に指名したりするような人物ではない印象があった。もしかしたら陛下なりにジュリアンに対して光明を見出して、機会を与えようとしているのだろうか。

ここで気がかりなのは、既に婚約者候補から外れた私がジュリアンの友人となった場合、私と実家の未来にどんな影響が及ぶのかということ。

何もせず黙ってやり過ごせば、問題はないのだろうか。

ああ、でも嫌だ……本音は断固断りたい。関わらないことこそが私の、ひいてはエティエンヌ家の最善なのに……

腹立ち半分で投げつけた言葉が、まさかこんな結果を招くだなんて最悪の誤算だ。私は全てにおいてもっと慎重になるべきだった。今更迂闊<sup>うかつ</sup>な自分を呪っても後の祭りだけだ。

優しい父母の、そして可愛い弟の顔が頭を過る<sup>よぎ</sup>。

悔しい……至高の存在を前にすれば、私の一族がどれだけ権勢を誇ろうと答えなど一択しかない。

「……かしこまりました。身に余る大役を賜り、光栄に存じます」

やっぱりジュリアンからは逃れられない運命なの？

内心涙目になりながら、震える手でカーテシーをする。

「期待している」

頭上から降ってくる声にふと視線を上げると、陛下がニイツと唇に笑みを刻んだ。笑っているのに、目が笑っていない——私を値踏みするような冷たい眼差しに、ゾクゾクッと全身に鳥肌が立った。

その後屋敷に戻ってから、私は思い出し得る限りのゲーム知識を書き出し、これから身の振り方を決めることにした。

ひとまず今後の目標を三点に絞ってみる。

①ジュリアンから逃れ、素敵な旦那様を見つけて温かい家庭を築く。

前世の願いが今世にも引き継がれ、どうしても温かい家庭というものに憧れがある。互いを労わり尊重し合えるような伴侶に巡り合えたら、これ以上の幸せはない。どんな手を使ってもジュリアンから逃れ、理想の旦那様を見つけて今生こそ幸せになつてみせる。

もちろん私の立場的に政略結婚の可能性は高いし、そこはよく理解しているつもりだ。でも父の見る目はイマイチ信用できないので、余程な場合に限り全力で辞退させていた

だ。

②協力者を増やす。

何をするにも人脈や情報は大切だ。ざっと記憶を巡らせ、私はルイーズに絶対の忠誠を誓っていた騎士を一人思い出した。ただルイーズも彼もメインキャラではないので、どの時点で巡り合えるのかが分からない。情報収集を怠らず、どうにか機会を逃さないようにしなければ。

あとは原作のようにやたらと敵を作らず、平和で穏やかな人間関係を築いていこう。そうしたら自ずと味方も増えていくかもしれない。

③家族を大事にして仲良くする。

ジュリアンに出会う前のルイーズは家族仲もいい、誰もが羨む幸せな令嬢だった。けれど、嫉妬が彼女の心を蝕み家族仲は拗れに拗れてしまう。特に弟のセルジオとの仲は最悪だった。セルジオは家門を守るため、最終的に王家側についてルイーズを陥れることを決意するのだ。だから家族と、特にセルジオとは仲良くする……というか既に私はセルジオが可愛くて仕方なく、嫌がられるほどに可愛がっている。むしろ構いすぎて嫌われてしまう可能性のほうが高い、気を付けよう……

「よし、こんなものかな！」

書き出したノートを眺め、今後の方針が粗方決まったことに満足する。

まだ何も始まってはいないし何も手にしてはいない。でも地道に頑張つて、ジュリアンとの関係だけはどうにか断ち切りたい。

当面の問題は半ば脅しのように取り決められてしまったジュリアンとの交流だけれど、心底億劫で堪らない。

そもそも「友人」とは対等な関係の上で成り立つものだ。私を下等な生き物と見下し、ゴミや虫けらのようにしか思っていないジュリアンと友人関係だなんて笑ってしまう。

でも、私はこの目標を達成するためならどんなことにも耐えてみせる。見合いの場では堪えきれなかったけれど、本来私の武器はこの並外れた忍耐力のはずなのだから。

「姉さん？」

不意の呼びかけに思考が中断され、慌ててノートを閉じる。

ガバツと顔を上げると、いつの間に部屋に入ってきたのか、セルジオが怪訝そうに私を見ていた。

「セルジオ!? ごめんね考え事してて気付かなくて……」

「姉さんらしくないね、城で何かあったの？」

少し癖のある赤毛にエメラルドグリーン瞳——私と同じ色彩を持つ弟が探るような

目付きで問う。聡明なセルジオのことだ、たとえ誤魔化してもすぐに嘘は見破られてしまうだろう。

私はセルジオに今日あったことを正直に打ち明けることにした。

「うん……実はジュリアン殿下と友人として交流してほしいって陛下から……」

「ジュリアン殿下だって!? 臣下達も頭を痛める暗愚ぶりだと評判じゃないか」

「セルジオ……」

とても七歳児とは思えない言葉のチョイスに苦笑してしまう。

セルジオは父の血を濃く引いたのか、とんでもなく聡明な子だ。世間では神童と専らもっぱの評判で、既に様々な学園からオファーが殺到している。鼻高々にして容姿は整っているし、姉としては鼻高々だ。

「そうね、一度しか会ってないけど、その評判は決して大袈裟ではなかったわ……」

はあと溜息をつくとき、セルジオは悔しげに唇を噛み締めた。

「僕が小さいから……まだなんの力もないから……」

ああ、この子は幼いなりに私の境遇に憤いらいってくれているのか。なんて姉思いの優しい弟なんだろう。

「セルジオっ!」

立ち上がってガバツとセルジオを抱きしめる。

「や、やめっ……放して姉さん！」

「やだ！ セルジオが可愛すぎるんだもん！」

ああ、本当に私の弟は可愛い。ジュリアンなんかのために将来仲違いするなんて信じられない。

腕の中のセルジオがもの言いたげにこちらを見上げてくる。私はそんな可愛い弟の頭を撫でながら微笑んだ。

「正直憂鬱ではあるけどね、彼の婚約者になることに比べたらこのくらいなんてことないわ」

そう、ジュリアンとの一生の牢獄から逃れられたのだ、このくらいはまだましなのかもしれない。甚だ不本意ではあるけれど……

やれやれと天を仰ぐと、セルジオはギュツと私のスカートの裾を握った。

「早く、大人になりたい……」

「えーセルジオはそのままいてほしいなあ。もうホント可愛いんだから！」

再び抱きつくど抗議を諦めたのか、セルジオは棒立ちのまま微動だにしなかった。

こんなに優しい姉思いの弟に心配をかけてはいけない。そして将来悲しい選択をさせ

ないためにもジュリアンに、運命に負けて堪るか、私は改めて肝に銘じるのだった。

身構えていたジュリアンとの初会合の機会はその翌月に訪れた。

前日から食事が喉を通らないほど憂鬱ゆううつだったものの、「しつかり見張りをつけてもらうから」という父の言葉を信じて王宮へ向かった。玄関ホールまで見送りに来てくれたセルジオは、終始ブスツと膨れていたらけど。

「――再度お目通り叶いまして光栄に存じます、殿下」

応接室に通され鮮やかな金髪が目に入った瞬間、私は今度こそ無礼を働かないように深々と頭を下げて、淑女の礼をした。でも、いつまで経っても楽にしるとの声掛けはない。目上の人間から許しがないまま頭を上げることは不敬にあたる。だから私はその姿勢をキープするほかない。

これは早速の意趣返しだろうか……

手も足もブルブルと震え出すけれど、すぐそこにふんぞり返って座っているジュリアンは無言を貫いたままだ。

私が苦しんでいる様を楽しんでいるのだろうか……本当に性格が悪い！

それでも、この会合は陛下から直々に依頼されたものだ。一度は許されたとはいえ、

これ以上王族であるジュリアンに不敬を働くことはできない。

結局どれくらいこの時間そうしていただろう。グラグラと目眩を感じ始めた頃、お茶を手にした侍女が入ってきて、すぐに退出した。その後侍女から報告を受けたのか、侍従らしき男性が一人慌てて駆け込んできて、私をソファに座らせてくれた。

ああ、助かった……全身の力が抜けると共にホッと安堵の息が漏れる。するとすかさずチツと盛大な舌打ちが聞こえてきた。

「貴様……私の邪魔をしたな！ ただでは済まさぬぞ！」

「恐れながら殿下、私は陛下の命を受けてこちらへ参りました。くれぐれもルイズ様に粗相がないようにと陛下からきつくい渡されております」

なるほど、この男性は陛下からの見張りだったらしい。感謝の気持ちを込めて目礼するや否や、ガシヤーン！ と大きな音が響き、ビクリと体が跳ねた。見れば床には割れたカップやお菓子が無残にも散らばっている。

ジュリアンが痙攣かんしんを起こしてテーブルのものを全て床に落としたようだ。

「殿下！ お静まりください！」

ジュリアンは諫める侍従を蹴り飛ばした。その弾みで、侍従の眼鏡が大きく弧を描いて後方に吹き飛ぶ。

信じられない……なんてひどいことを！

ダメだ、半ば強制とはいえ私自身がした陛下との約束事に、他人を巻き込んではいけない。この侍従にだつて守るべき大切な存在がいるはずなのだから。

私は咄嗟に侍従とジュリアンの間に割って入った。その途端ジュリアンの振り上げた掌が私の頬に当たる。痛いというより熱い。チカチカと視界に星が散る。

小さいくせになんて馬鹿力だ。こんな容赦ない力で日々暴力に訴えていたなんて。

ジンジンと熱を持つ頬を押さえ、私は屈んで床に落ちた眼鏡を拾い、侍従に手渡した。

「大丈夫ですか？ 巻き込んでしまつてごめんなさい」

「ルイズ様、そんなことよりもお顔の手当を……」

「いいえ、私はジュリアン殿下の『友人』として招かれていますから、これぐらい戯れの範疇でしょう。熱い歓迎痛み入ります、殿下」

痛みで涙が滲むけれど、ここでは絶対に泣くもんか——その一心でジュリアンを見上げ無理やり笑顔を作った。

するとジュリアンは若干狼狽うろたえたように一歩後ずさる。流石に私に手をあげるつもりはなかったのだろうか。

私は侍従を立ち上げらせ、ひどい有様の床に目を落とした。

「申し訳ありませんが片づけをお願いしてもよろしいでしょうか」  
 「もちろんでございます、すぐに別室へご案内いたします」

「いえ、その必要はありません。殿下、今日はご気分が優れないようですのでまた日を改めさせていただきます」

よろしいですよ、と視線を投げるとジュリアンはコクコクと首を縦に振った。

「では失礼いたします」

「ま、待て！」

慌てた様子でジュリアンに引き止められた。そしてジュリアンは私のもとまでツカツカと足早にやってくるなり、バツと手を振り上げた。また殴る気かと反射的に身構えると、ジュリアンは不貞腐れたようにブスツと顔を顰めた。

「殴らないから、ジツとしていろ」

その言葉に先程までの険は感じられない。訝しく思いながら様子を窺っていると、ジュリアンは私の頬の上に手をかざした。

すると不思議なことに熱と痛みがスツと嘘のように引いていく。

まさかこれ、治癒魔法？

思わず首を傾げたところで、「まだ動くな！」と苛立たしげに怒鳴られた。

「申し訳ありません……」

慌てて姿勢を正し、真剣な様子のジュリアンを観察するように眺める。

この世界には少数ながら魔法を使える者達が存在するけれど、ジュリアンにそんな設定があっただろうか。少なくとも原作内で魔法を使う場面はなかったように思う。ただ、ジュリアンの母親である王妃様の家系にかつて大魔導師が存在したことは有名な話だ。

なるほど、ならば魔法が使えてもなら不思議はない。でも――

「ありがとうございます。でも何故治療してくださいのですか？」

「か、勘違いするな！ 貴様のその不細工な顔に傷でも残ったりますます嫁のもらい手なくなるのだろ！ 責任取れなんて死んでも言われたくないからなっ！」

なるほど、私と同じ気持ちのようで何よりだ。

顔を真っ赤にして毛を逆立てているジュリアンに、私はにっこりと微笑んだ。

「安心してください、死んでも言いませんから」

「なんだと！ この身の程知らずのチンクシャめが！」

なおもギャンギャン吠えだてるジュリアンを右から左に受け流す。

ああ、もう本当に面倒くさい人だ。この暴君は、全てが自分を中心に回っていると信じて疑っていない。

一応治療してくれるのはありがたいけれど、そもそも些細なことで暴れる自身のその幼稚さ、異常さに気付いてほしい。まあ、原作通りならヒロインに会うまでは無理なんだろうけれど……

あれこれと考えを巡らせている間にも、ジュリアンは真剣な表情で私の頬に手をかざし続けていた。

「……治ったぞ」

惘然と告げられ頬に触れてみると、熱や腫れはなく、痛みも嘘のように消え失せている。

初めて目にする魔法——素直にすごい力だと感心する。同時に、親の仇のように嫌っている私にその貴重な力を使ってくれたことにほんの少しだけ感謝する気持ちも湧く。

まあ元はいえはジュリアンの癩癧が原因なんだけれど……

陛下がジュリアンを見捨てず影から見守り続けている要因は、この一抹の良心のようなものも関係しているのだろうか。

「感謝いたします、殿下。それでは失礼いたします」

ジュリアンと侍従に礼をして、私は足早に応接室を出た。

はあ、やっと終わった！ 初日からこの調子では先が思いやられるな……

解放感と憂鬱ゆううつという両極端な気持ちを抱えながら、私は逃げるように馬車へ駆け込んだのだった。

屋敷へ着くなり、私は報告と確認のためまっすぐ父の執務室を訪ねた。そうして情報収集した結果、やはりジュリアンには先祖返りのような魔法の才があるらしいことが分かった。中でも強力な攻撃魔法を得意としているので、周囲の者達は余計に彼に逆らえないのだという。

見合いの日の怯えたような侍従や騎士達の顔を思い出し、その心中を察して溜息が出る。

次の呼び出しはいったいいつになるんだろう。考えただけで鳩尾みせおちがギリギリと痛みだした。

二回目の呼び出しを受けたのは翌月のことだった。

この会合は月に一度に設定されているのだろうか……そう思っていたのだけれど、いつからかジュリアンの呼び出しは二週に一度になり、果ては週に一度という頻度に変わっていった。

会合のたび心身に受ける苦痛は常に人払いが為される上、外傷はジュリアンがその場

で治してしまうので、薄々勘づく者がいようと証拠がない。だから誰も咎めることはできないという悪循環が生じている。

初日の会合で怪我を治してくれたことにはほんの少し感謝したけれど、まさか「治せば傷つけてもいい」という方向にシフトするとは思ってもなかった。

全く何が友人だ、奴隷の間違いだろう。しかも私が周囲の人間に何も告げ口をしないせいか、段々とジュリアンのやることはエスカレートしていく。

こと嫌がらせに関してジュリアンは天才的で、その性根の醜さと歪みっぷりにはつくづく感心させられた。これぞダメンズの本領発揮といったところか。

心底うんざりして、私もはじめは逆らったり反抗的な態度を取ったりもしていた。でも、そんな私が一切の抵抗をやめることとなる決定的な出来事が起こったのだ。

それはある会合の日、少し早めに王宮へ着いてしまった時のこと。

庭園を散策して時間を潰すことにしたところ、偶然顔見知りの令息と鉢合わせた。特に親しい方ではなかったものの、敵陣に一人あつては見知った存在について気が緩んではまう。挨拶がてら軽く雑談を交わしていると、運悪くジュリアンに出くわしてしまった。

「貴様……誰だその男は」

敵意も顕わに令息を睨めつけるジュリアン。令息は冷や汗をかきながら私とジュリア

ンの顔を交互に見る。私は彼を庇うように前に進み出て膝を折った。

「第一王子殿下、彼とはちよつとした顔見知りの間柄です」

「そ、そうです！ エティエンヌ令嬢と自分は——」

「黙れ！ 貴様ごときに発言を許していない！」

ひいひいと縮こまる哀れな令息を尻目に、ジュリアンは私の手首を掴んで王宮とは反対側のほうへ歩いてゆく。私は引きずられるようにジュリアンの後を追うしかなかった。やがて辿り着いた先は見慣れない塔のような建物だった。日当たりの良くない暗くジメジメとした場所にあるその建物は見ているだけで陰鬱な気分になる。

「殿下……ここは？」

ジュリアンはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべ、建物の影の叢に私を押し倒した。そうして上から覗き込むように顔を近づける。

「私の前で他の男と親しげにすると……いい度胸をしているな」

すぐに否定の言葉が口をついて出そうになったものの、横を向いて沈黙を保つ。どうせ何を言っても火に油を注ぐだけだ。

すると強い力で顎を掴まれて上向かされた。途端に怒りとも憎悪ともつかない蒼い瞳が、異様な輝きを放ってギラギラと私を射貫く。



ゾツとした。ジュリアンに殺されるかもしれないと思ったのは後にも先にもこの時が初めてだった。

「で……んか……？」

「ここがどこかと聞いたな。ここは永久牢獄、一度入ったら二度と出られぬ監獄だ」

永久牢獄——その名を聞いた瞬間、全身から血の気が引く思いがした。

だって、そこは『ルーズ・エティエンヌ』が最後に投獄される場所——

「あ……ああ……！ ゆる、して……ゆるしてください、殿下……！」

震えながら涙を零す私を見て、ジュリアンは至極満足そうに笑った。

「貴様は私のものだろ？」

私は木偶のようにこくこくと頷く。

「貴様など私にはどうにでもできる。決して逆らうな」

「は、い……」

涙ながらに私は思った。こんなところで人生を終えてなるものか。私が従順になることでジュリアンが満足するのなら、お望み通りのものになってやろうと。

その日を境に、私はジュリアンの従順な人形になった。

何をされても感情など出さない、私はただの人形——そう自分に言い聞かせて。

ジュリアン付きになったらしい眼鏡の侍従とは初回以後もよく顔を合わせた。彼はそのたび悲痛な眼差しでこちらを見ていたけれど、彼を巻き込またくない私は何も言わないよう無言で介入を拒み続けた。

そうして私はたった一人、苦痛や屈辱に耐え続けていた。

彼の人生に干渉するようなことは絶対にしたくなかったし、深く関わることで私の将来が脅かされることを最も恐れたからだ。

——でも、そんな私の忍耐も二年で限界を迎えた。

ある会合の日、私を心配してくれたのか、いつになく強引に会合場所へ入ってこようとした侍従が激昂したジュリアンに殴り飛ばされた。急いで侍従に駆け寄ると、彼に意識はなく、近くにいた衛兵達が手慣れた様子でどこかへ運び去っていった。恐らく救護室だろう。

私のために人が傷ついてしまった——到底許し難い現実を目の当たりにし、私はついに本気でプチ切れてしまったのだ。膨大に蓄積した怒りを前に、これまで耐え続けていた動機など綺麗サツパリ霧散した。

「——私、地位に胡座を<sup>あぐら</sup>かいて弱きを<sup>くじ</sup>挫くような人間は大つつ嫌いです」

できる限り淡々と無表情で告げると、ジュリアンはこちらを振り返りキツと私を睨<sup>ね</sup>め

つけた。

「貴様何を無礼な！ 私は断じてそのような人間ではない！」

「無知は罪なり、知は空虚なり……ですわね」

「な、なんだそれは！ 貴様何を言っている!？」

この世界にはなかった格言かもしれない。でもいい、こうなったら言いたいことを全部ぶちまけてやる——！

「知らないことは罪ですけど、知っているだけではなんの意味もない。学んで身につけて役に立てることが大事ってことです。そもそもジュリアン様は無知から始まっているかもしれません」

「お、お前！ 私を愚弄するの catt！」

目を三角に吊り上げるジュリアンに、私は心から憐れみを込めて微笑んだ。

「面と向かって苦言を呈す人が一人もいないなんて、可哀想な方。あなたはある意味絶対的権力の犠牲者なのかもしれませんね」

周囲に甘やかされ、冷徹な国王陛下には自ら気付けとばかりに突き放されて……

そんな現状を鑑みれば、ジュリアンも被害者なのかもしれない。何せ彼には今までは非善惡の分別すら教えてくれる人がいなかったのだから。

ふうつと深く溜息をつけば、ジュリアンはさらに怒り心頭の様子で、顔がタコのように真っ赤になっていた。握り締めた拳がブルブルと震えている。

また手を上げるつもりだろうか——構わない、私を殴りたいなら好きにだけ殴ればいい。

そもそもジュリアンは、指先一つで私などどうにでもできる権力を持っている。現にその使い方をよく分かっている彼は、片鱗を見せつけ逆らうなど脅してきたではないからだ。こんな風に真っ向から諫められることなんて、これまでただの一度もなかったのだろう。そのことに、なんだか今は怒りよりも憐れみが湧く。

彼はいづれ国を率いる立場にある。なんの挫折も知らず、無知と傲慢に溺れるような人間のままでは彼のために、国のためにもならない。

ふと、何を俤そうに、私がどれほどの人間だと自嘲の念が湧く。国を率いる重責など、私のような凡人には推し量る術もないというのに。

でも私にはゲーム知識という最強の切り札がある。それを利用すればジュリアンを良い方向へ導く手助けができるのではないだろうか。

そうだ、もしジュリアンが真人間になってくれたなら……私の未来が脅かされる可能性は限りなく低くなるはずだ。